

ベルリン・フィル ～最高のハーモニーを求めて

2008(平成20)年10月22日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★



監督＝トマス・グルベ／映画音楽＝シモン・シュトックハウゼン／出演＝サー・サイモン・ラトル(首席指揮者)／ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団(セテラ・インターナショナル配給／2008年ドイツ映画／108分)

……ベルリン・フィルといえば、フルトベングラーかカラヤン。そう言うあなたにはちょっと古い……？ この映画は、05年秋の大規模なアジア・ツアーにおける、最高のハーモニーの追求に燃える楽団員たちの姿を通して、ベルリン・フィルの本質に迫ったもの。すると、音楽を聴きたいというファンには不満？ それは少し我慢して楽団員たちの人間模様を観察すれば、それも面白い……。

05年秋のアジア・ツアーに焦点を

この映画は、首席指揮者のサー・サイモン・ラトル率いるベルリン・フィル126名のメンバーが、05年秋に行った北京、ソウル、上海、香港、台北、東京の6都市を回る大掛かりなアジア・ツアーに焦点をあてたもの。日独伊の「三国同盟」を結んでいた日本では、ヴァイルヘルム・フルトベングラーやヘルベルト・フォン・カラヤン率いるベルリン・フィルは特に親しみが強い(?)が、さて中国や韓国では？

そんな私の心配は全くの杞憂で、26年ぶりの再訪となる北京でも上海でもそして香港でもベルリン・フィルは大歓迎されたようだ。私がビックリしたのは、この映画にみる台北における数万の聴衆の熱狂ぶり。ロックバンドに熱狂する数万、数十万の若者たちの姿はよく見るが、ベルリン・フィルの楽団員もこんなすごい歓迎ははじめての経験だろう。そんな姿を追っていく4台のハイビジョンカメラが捉える映像は、まさにナマ。

音楽映画はつくり方が難しい

音楽家をテーマとした映画には、フランツ・リストを主人公とした『わが恋は終わりにぬ』(60年)、モーツァルトを主人公にした『アマデウス』(84年)、ベートーヴェンを主人公とした『敬愛なるベートーヴェン』(06年)、『シネマルーム12』277頁参照)などがある。また交響楽団をテーマとした映画は、『オーケストラ・リハーサル』(78年)や『オーケストラの向こう側～フィラデルフィア管弦楽団の秘密』(04年)、『ヴィットリオ広場のオーケストラ』(06年)、『シネマルーム18』313頁参照)などがある。

難しいのは、そのつくり方。つまり音楽を聴かせることに重点を置くのか、それともストーリーに重点を置くのかが、観客の好みによって違うからそのつくり方は難しい。そのうえ、この映画はドキュメンタリー映画だから、さらにつくり方が難しい。この映画では、①ベートーヴェンの交響曲第3番『英雄』、②シュトラウスの交響詩『英雄の生涯』、③トーマス・アデスの管弦楽曲『アサイラ』の3曲が使われるが、じっくりと聴かせるシーンは少なく、ラストの字幕と共に流れるのが1番長いくらい。したがって、音楽ファンには不満があるかも。すると、それを犠牲にしてまでもトマス・グルベ監督が狙ったものは……？

テーマは楽団員たちの人間模様

トマス・グルベ監督はこの映画で、ベルリン・フィルの音楽を聴かせることよりも、楽団員たちの人間模様を描くことにウエイトを置いたようだ。頻繁に登場するのは首席指揮者のラトルだが、その他はミハエル・アフカム(ヴィオラ候補生)、マヤ・アヴラモヴィチ(第1バイオリン)、アリーネ・シャンピオン(第1バイオリン)、ラファエル・ヘーガー(パーカッション候補生)など、年齢も立場もさまざまな楽団員たち。

彼ら彼女らがインタビューの中で語る言葉を繋ぎながら、ドキュメンタリー映画が構成されていくわけだ。楽団内部での競争の厳しさや入団するための候補生たちの競争の厳しさはもちろんだが、最高のハーモニーを求めて全員がいかに全力を投入しているかが最大のポイント。なお、楽団員たちのユニークな休日の過ごし方を見ると、いかにも個人主義の確立したドイツの楽団らしいと思ったのは私だけ……？

ホントは3本セットで……

1882年に創設されたベルリン・フィルの125周年記念として今般上映されるのは、この映画の他、『帝国オーケストラ ディレクターズカット版』（07年）とアンコール上映される『ベルリン・フィルと子供たち』（04年）。『キネマ旬報』11月上旬号は「Kinejun Select」として『帝国オーケストラ ディレクターズカット版』を載せているが、私もどちらかというところ『ベルリン・フィル～最高のハーモニーを求めて』よりは『帝国オーケストラ ディレクターズカット版』の方に興味がある。また、『ベルリン・フィル～最高のハーモニーを求めて』のトマス・グルベ監督がサー・サイモン・ラトルの全面協力のもとにつくった『ベルリン・フィルと子供たち』は数多くの映画賞に輝いたらしい。

したがって、ホントはこの3本をセットで観るのがベスト。私にもそのチャンスはあったのだが、時間的にやりくりがつかず、『ベルリン・フィル～最高のハーモニーを求めて』1本のみになったのは残念。いつか残り2本も観なければ……。

2008(平成20)年10月25日記

ミニコラム

どこまで下がるの？ 薄型テレビ

世の中には「家電マニア」がいるらしい。かく言う私もかつてはオーディオマニア兼家電マニアの一員。LPレコードがCDに代わり、さらにMDまで登場したが、それ以上の大変革が薄型テレビの登場。当初は1インチ1万円が標準だったが、大型化が進み、量産化が進み、そして「ブラウン管テレビは製造中止！」と宣告されるに及んで、世の中は一気に薄型テレビ時代に突入した。パナソニックとシャープが

競い合ってきたが、世界的金融危機の深刻化と戦後最悪の経済不況を迎えた09年2月時点でこんなベラボーな価格下落は想定外。09年末には42型で14～5万円という時代が到来するとか。そう思っていると、何とイオンはDVDプレイヤー内蔵32型液晶デジタルテレビを国内最安値の49,800円で販売を始めるらしい。一体どこまで下がるの？ 薄型テレビ。

2009(平成21)年2月25日記